私にとっての「跡」

高　一

世の中には、生まれつき目が不自由であったり、耳が聞こえにくかったりするという、健常児とは違う状態で生まれる人がいる。私もその一人で、生まれたときに左足を脱臼し、鼻の穴も開いていなかった。そのために、生まれたときから保育器の中で過ごし、五才まで小児科の病棟で暮らしていた。定期的に検査を受け、歩くためのリハビリを繰り返していた。移動するときには車いすを使っていた。退院したときには、左足と鼻に手術の跡が残っていて、歩き方もぎこちなかった。そのため、小学校に入ったときに何人もの友達から「走り方が変。」「鼻がみんなと違う。」とからかわれて、走ったり、人前に立ったりするのが怖く感じるようになった。

周りの友達からばかにされて、気分が落ち込んだときに、私はいつも音楽を聴いていた。曲は、勇気をくれる人生の応援歌、友達を大切に思える歌、傷ついた心を癒してくれる歌などいろいろなものだった。そのなかで私を支えてくれた曲の歌詞に「いま君のいる世界が辛くて泣きそうでも、それさえも『プレゼント』だったと笑える日が必ず来る」※という一節がある。「手術跡が変。」と言われ、笑われて辛いと感じても、それを耐えることで、いつか頑張っていくためのバネになると、私は考えることができた。この歌のおかげで、私は勇気が出てきて、自分の殻にこもらずに他人と関わろうと決意し、積極的に話しかけるようにした。すると、コミュニケーションをとることで、お互いを理解し合えるようになり、一人一人には違う個性があることが分かってきた。

このような音楽の力によって、私は今の居場所を見つけることができた。高校に入学して、軽音楽部に入った。今度は自分が曲を作り発信することで、一人でも多くの人たちに勇気や生きる意味を届けたいと考えたからである。

今までの自分を振り返ってみると、身体のことを言われて傷ついたという被害者の立場であったのと同時に、あまり意識していなくても他人に辛い思いをさせてしまったこともあった。被害者になったときは、言った相手のことを信じられなかったが、逆に自分が加害者になったときは、あまり罪悪感がなかったことにも気付いた。加害者になったというのは、クラスでいじめがあったと

きに見て見ぬふりをする傍観者になっていたという経験だ。私が中学生のとき、朝教室に入ると、一人の男子に対して数名が攻撃的な言葉で責めていたことがあった。私はそれを止めることもせず、黙っていた。暴言を吐かれていた男子からすると、私の行為は加害者と同じだと思う。周りの雰囲気に逆らうと、次は自分がいじめの対象になってしまうことを恐れて、助けることができなかった。他人の言動で嫌な思いをしていた自分が、あのとき何かできなかったのかと後悔している。

私はこの先も、自分の手術跡と共に生きていかなくてはならない。世界には病気と共に生きていかなくてはならない人もいる。でも私はこの跡を、自分にしかない特別なものだと胸を張って生きていきたいし、病気や障害もその人の個性だと思っている。それぞれの個性が尊重される社会であってほしい。

こうしたことに気付かせてくれたのは、祖母のおかげだと思う。私が入院しているときに、眠るまで付き添ってくれたり、病院食が苦手だったので、好物を買ってきてくれたりした。そして何より、「人に優しくすること」「礼儀正しくすること」の大切さを教えてくれた。祖母は戦争を経験していて、昔はいろいろな差別があったことや、その差別が誤りであったことについても話してくれた。現在でも差別があり、そのことで辛い思いをしている人もいる。差別と戦っていくことと共に、周りで支えてくれる人にも感謝して未来を創っていくことが大切だ。

※引用「プレゼント」作詞 Saori　作曲 Nakajin